松戸市の概要

松戸市は、千葉県北西部に位置し、面積は61.38㎢、江戸川を挟んで東京都と埼玉県に隣接しています。東京都心部からは20㎞圏内にあり、6路線23駅と周囲の都市と比べて路線・駅とも多数あり、また江戸川や坂川、21世紀の森と広場をはじめ斜面林などの樹林地や街路樹など、水やみどりの多彩な資源に恵まれています。台地と低地、谷津で形成される地形は起伏に富み、低地部を中心に12の一級河川と9の準用河川が流れるなど、まちに豊かな表情を生み出しています。

松戸市街と江戸川

国分川

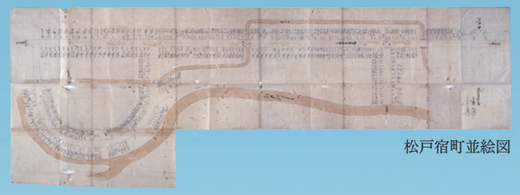
交通の要衝・宿場町として繁栄

平安時代には、今の市川市国府台付近に下総国の国府が置かれ、ここから常陸へ向かう官道が市域を通っていました。戦国時代は小金城主・高城氏が東葛を支配したため、小金が政治や交通の中心地になりました。

江戸時代に幕府が水戸街道を整備すると、松戸と小金は宿場町として繁栄し、松戸の江戸川沿いには河岸が設けられ賑わいを見せていました。また、常盤平・松飛台・五香六実の一帯は、小金牧と呼ばれた幕府直轄の馬の放牧場で、幸谷の福昌寺にある絵馬には野馬捕りの様子が描かれており、徳川将軍による御鹿狩りを描いた錦絵も博物館に展示されています。

明治時代になると、市域の町村は千葉県に属しました。明治22年に栗山村などと合併して成立した松戸町は、郡役所、郵便局、警察署、裁判所が置かれるなど東葛飾郡の行政の中心地でした。明治29年、現在の常磐線が開通し、松戸駅、馬橋駅、北小金駅が順次開設。大正5年に流山鉄道(現流鉄)が開通し、大正12年には現在の東武野田線が開通、六実駅が開設されました。

温故東の花 第五編 将軍家於小金原御猪狩之図


松戸宿町並絵図

馬橋駅(昭和36年頃)

北小金駅(昭和29年頃)

六実駅(昭和36年頃)

松戸に住んだ幻の将軍

明治17年、江戸幕府最後の将軍徳川慶喜の実弟徳川昭武が戸定邸を建てて松戸に移り住みます。戸定邸は、明治前期の大名華族の邸宅で、建築当初の建物の大部分が現存する全国的にも数少ない貴重な事例として、平成18年に国の重要文化財に指定されています。

また、客間の前に広がる洋風技法を取り入れた庭園は、平成27年に「旧徳川昭武庭園(戸定邸庭園)」として国指定名勝になりました。徳川昭武は多彩な趣味を持ち、明治時代の松戸を撮影した貴重な写真が数多く残されています。

徳川慶喜(左端)・昭武(中央後方)ほか集合写真(明治22年)

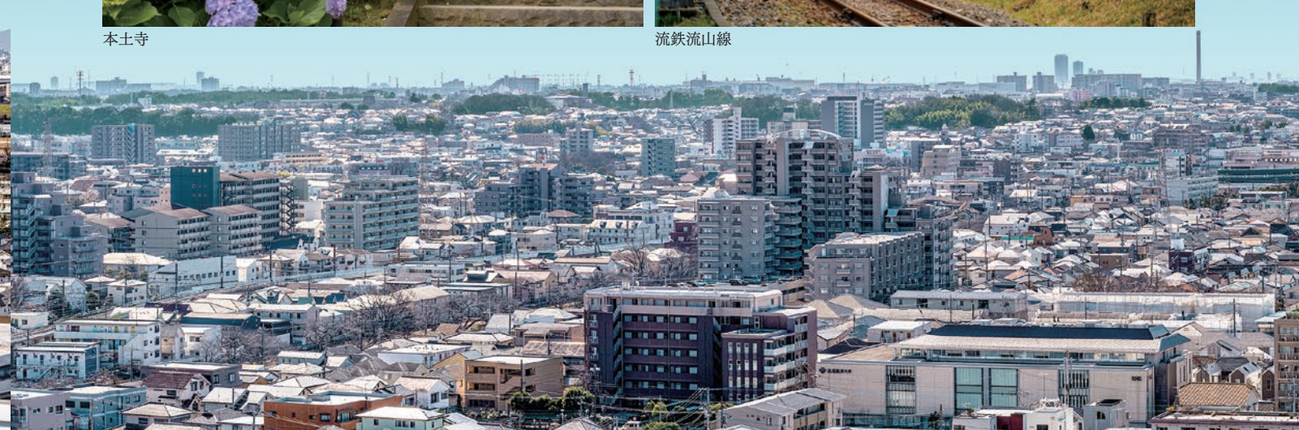
戸定邸／徳川慶喜撮影(明治31年)

市制施行

昭和18年、松戸町、高木村、馬橋村が合併して人口約4万人で市制を施行しました。終戦後、政治社会体制の大きな変革の中、松戸市の都市づくりが始まります。昭和29年に旧小金町の大部分を編入、昭和31年には沼南村の一部を併せて現在の市域となりました。

昭和30年の新京成電鉄松戸駅~津田沼間の開通、昭和35年の常盤平団地の入居開始を経て、昭和43年に市の人口は20万人を突破します。昭和46年には、常磐線が複々線化されて営団地下鉄千代田線の相互乗り入れが始まるなど、松戸市は急激に膨張する首都東京の住宅需要の受け皿として、日本の高度経済成長を支えました。

昭和50年代に入ると、人口急増の歪みを是正するため計画的な都市づくりを推進していきます。市制施行50周年を迎えた平成5年には「21世紀の森と広場」がオープンし、都会的な機能と自然の豊かさが融合する成熟した街へと成長を遂げ、現在、約50万人の市民が暮らす首都圏有数の規模を誇る都市として発展を続けています。

本土寺

流鉄流山線